# 2. 飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ資料集(中)

### 2 - 1 国指定・国分寺大イチョウ (108点)



飛騨国分寺の本堂と鐘楼門との間に位置し、樹齢お よそ 1,200 年の雄株で、枝葉密生し、樹間の所々に乳 を垂れ、樹勢は盛んである。

由来については往昔行基菩薩の手植と伝えられる。 俗に乳イチョウの名がある。乳の出ない母親にこの樹 膚を削り与える時は乳がよく出る、といわれている。 根元に石像が祀ってある。

昔から、国分寺のイチョウの葉が落ちれば 雪が降る、とも言い慣らされている。



## 2 - 2 国指定・飛騨国分寺塔心礎 (19点)



境内には室町時代に建てられた国重文の国分寺本 堂があり、その東側に玉垣で囲われた塔心礎石がすえ てある。飛騨国分寺は天平13年(741)の詔により天 平勝宝9年(757)頃までには完成していたらしく、 この心礎は創建当時のものと推定される。

礎石の形状はほぼ方形を呈し、上面に円柱座を造り 出し、その中央部に円形の穴があけられる。 礎石の寸法は、径約 2m 四方、地上高さ約 1m、円柱座径 133cm、高さ 1cm、円穴径 58cm、深さ 29cm で、枘穴式心礎である。



### 国指定・松本家 (257点) 2 - 3



明治8年(1875)、二之町で出火した火災は三町、 寺内町、八幡町、鉄砲町などに延焼し 1,032 戸を焼失 した。桜山八幡宮、別院など寺院や多くの町家が類焼 したが、松本家住宅は火災を免れた。市内の町家の中 では最も古く、改造があまりされていない貴重な建物 である。

漬物蔵の化粧裏板に「文政9戌年(1826) 5月18日屋根棟上」、窓框に「文政9年戊4 月 27 日出来」の墨書が見られることから、 主屋の建設年代もその頃と推定される。



## 国指定・田中家 (170点)



この建物は、もと高山市の北部中切町にあったもの を二之町薬種商田中屋の第4代田中大秀が買い、冬頭 村の田舎として文化年間(1804~1818)に移築、手代 茂七郎(庶子)に与えたという。1度移築を受けている が、内部は昭和の初めまで建設当初のままで土座形式 であった。飛騨の石置板葺の民家の中で18世紀前半ま で溯る代表的な建物の1つである。

# 2-5 国指定・照蓮寺 (104点)



永正年間 (1504~1521) の建立と伝えられるこの本堂は、書院造を基調として、道場発祥の過程を物語る真宗寺院最古の遺構である。荘川村中野にあって中野御坊と呼ばれてきたが、御母衣ダムが建設されることになり、昭和33年から35年にかけて現在地に移築された。延宝6年 (1678) の棟札や小屋束の墨書から、

当時の流行であった本願寺式急勾配の屋根 に改装されていたことがわかり、移築の際に 創建当初の緩やかな屋根に復元された。



# 2-6 国指定・高山陣屋 (442点)



天正 14 年 (1586)、金森長近は秀吉の命により飛騨を平定し、領主に任ぜられた。以来、6 代 107 年間にわたって藩政時代が続いたが、元禄 5 年 (1692) 徳川幕府は金森頼旹を出羽国上ノ山に転封し、飛騨一円を幕府直轄領とした。それ以来、明治維新に至るまでの177 年間に、25 代の代官・郡代が江戸から派遣され、領地の行政・財政・警察などの政務を行なっ

た。この御役所を「高山陣屋」と称する。



# 2-7 国指定・重要文化財 荒川家住宅(母屋・土蔵) (280点)

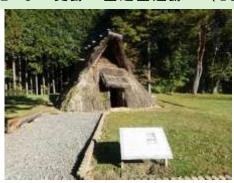


荒川家は、天正年間に当町の肝煎をつとめたと伝える旧家で、元禄以来代々周辺 6 ヶ村の業帯名主をつとめていた。

この住宅は、母屋棟札により寛政8年(1796年)土 蔵は普請文書及び2階床板墨書などから延享4年 (1747年)に建築されたことを知ることができる。



## 2-8 史跡・堂之上遺跡 (107点)



本遺跡は、古く明治・大正時代からその存在が知られていたが、学術調査も行なわれることなく、また破壊もされず畑として耕作されてきた。

昭和 47 年久々野中学校郷土クラブ員により遺跡の一部が発見されたため昭和 48 年から昭和 54 年までの7 年間にわたり岐阜県教育員会・久々野町教育委員会の発掘調査が行なわれた。

この結果約75aの小舌状台地にほぼ完全に 残されている縄文時代前期から中期(約5,500年~4,000年前)の集落跡としての様 相が明らかにされた。



## (49点) 2 - 9 国指定・吉真家



吉真家は角川にあったが、ここは宮川と小鳥川の合 流するところで河岸段丘になっている。中央部に南面 して建てられ、安政5年(1858)の角川地震以後、礎 左衛門が小鳥川上流の「保(ほ)」から移築した。昭和 45年11月から半年かけて現在地の飛騨民俗村へ移築 している。

この家は、飛騨でも有数の豪雪地帯にあ り、また角川地震にも耐えてきただけに、 どっしりとした土台、太い柱や梁、桁を用い、 構造は簡潔で規則的である。



## 2 - 1 0国指定・若山家 (175点)



荘川村に 2 軒あった合掌造りの 1 つで下滝にあっ た。電源開発による御母衣ダムの建設により水没する ため、昭和34年、現在地へ移されている。

若山家は荘川造りといわれる入母屋造りから、白川 村の合掌造りに移行する唯一の建物である。外形は白 川村の合掌造りだが、小屋組は荘川式の入母屋造りに 近い構造をしており、その他にも両様式が共存する点 が多い。建築年代は高山の大工によって宝暦 初年(1751)に建てられたと伝承はあるが、 構造手法から 18世紀末頃ともいわれる。

## 国指定・田口家 (228点)



田口家は、飛騨と美濃の国境に位置する金山町卯野 原という部落にあった。代々庄屋をつとめた農家で、 集会に利用されたため部屋数が多い。小さい囲炉裏 1 つ、長方形の大きいものが2つ設けられ、来客の用に こたえる間取りとなっている。

建築の記録に、文化5年(1808)から翌6年にかけ て材木の伐採から完成祝いまで記録された 普請帳が7冊と、文化6年の墨書がある古い 屋根置石がある。



### 2 - 1 2 指定天然記念物 治郎兵衛のイチイ (231点)



このイチイは、推定樹齢 2 千年以上といわれ枝張り は13mにおよび、その胸高での幹周りは7.95m、樹高 は 15m の巨樹で、昭和 63 年度環境庁の巨樹巨木調査 イチイの部で日本一に認定された。

鈴木家では、この地方の風習に従って墓標として先 祖代々守り育てられ、屋号を治郎兵衛と称したことか ら、治郎兵衛のイチイと呼ばれている。



## 2 - 1 3 (236点) 旧大戸家住宅



国指定重要文化財(建造物)昭和31年6月28日指定 この旧大戸家住宅は大野郡白川村から昭和 38 年に 原型のまま移築された。建物の大きさと独自の構造は、 大家族制度を代表する合掌造りの建物である。

建築は、天保4年(1833)~弘化3年(1846)の13 年間をかけて造営された。建物の規模は、桁行 21.4m、 梁間 12.27m、棟高 13.0m、形式は、切妻、茅 葺、内部4階建となっている。

## 2 - 1 4 史跡江馬氏館跡公園 国史跡江馬氏城館跡 下館跡 (184点)

ある。



この公園は、今から 400~600 年前の室町時代から 戦国時代に、北飛騨を治めた武将の江馬氏が築いたと 考えられる館跡の一部を復元したものである。

発掘調査により、下館は 14 世紀末~16 世紀初め頃 まで使われていたことがわかった。館は東側の山を背 に、北・西・南を土塀と堀で囲んだ方約1町(約100m 四方)の規模であり、館の正面となる西側に 2ヶ所の門を、その邸内には礎石建物や庭園 が設けられていた。

### 国指定・荻町(白川村) 2 - 1 5 (98点)



白川村を「下白川郷」、荘川地域を「上白川郷」と呼 んでいた。今は白川村のみを指すことが多い。

白川郷の荻町地区は合掌造りの集落で知られる。独 特の景観をなす集落が評価され、1976年重要伝統的建 造物群保存地区として選定、1995年には五箇山(相倉 地区、菅沼地区)と共に白川郷・五箇山の合掌造り集 落として、ユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録さ れた。白川郷の荻町地区は、今も実生活の場 として使われているところに価値があり、そ れが他地域の合掌民家集落と違うところで



## 2 - 1 6 県指定・新井家 (174点)



この家は、高山市の西に隣接する清見村池本の小鳥 川沿いにあった。背後に山が迫り、狭い水田の間にあっ た。建築時期は江戸後期と推定され、明治 43 年に 4 寸 の垂木に取り替え、2mの積雪にも耐えられる屋根に改 造している。

外観は低く、どっしりとした感じを与える。構造は、 1 間毎に梁をかけて束を立て、母屋を支えて いる。飛騨の里へ移築後、屋根を改造し、煙 出しをつけ、部屋の換気を考えた。小庇には ムクリ破風をつけているのが目につく。



## (141点) 2 - 1 7 県指定・中薮家



中藪家は、JR 飛騨一之宮駅の西側にある山下にあっ た。田中家や野首家と似て軒高が低く、勾配は緩い板 葺石置屋根である。飛騨地方の中央部にある民家の特 徴を持ち、土座生活の名残りを留めている。建築年代 は明らかでないものの、たちが低く、柱に蛤刃、釿痕、 その他古い仕口などを残しており、江戸中期以前とも いわれている。

## 2 - 1 8 県指定・西岡家 (69点)



旧所在地は白川村北部の加須良で、蓮受寺の庫裏と して建てられていた。加須良地区は豪雪地帯で、峠を 1つ越えると富山五箇山の桂集落(上平村)があった。 この両集落は関係が深く、建築様式は上平村の民家と の類似性がある。

この家は越中に近いため間取りは整形広間型とな り、「オエ」と「デイ」の板戸や、天井竿等 に漆を塗るなど仕上げが良い。広い「オエ」 には2つの囲炉裏が配置され、天井は簀子で ある。



## 2 - 1 9 県指定・野首家 (138点)



この建物は、元禄8年(1695)の検地帳や当時の絵 図に記載されている家と、建物面積、位置が一致して いた。元禄検地以前の建物と推定される。元禄検地水 帳に「しものくび 間口八間半 奥行六間 屋舗云々 八兵衛」と記載され、19代目の野首秋蔵も、通称「片 野の八兵衛」と呼ばれた。昭和37年、野首氏から本建 物の寄付を受け、3月に現在地へ解体材を集 積した。同時に、解体調査を行ない、昭和40 年 10 月から翌年 2 月までかかって復元修理



### 2 - 2 0県指定・セイロ倉 (105点)



角材を積み上げてつくった校倉様式である。1 階は 穀物を入れ、2階には道具類を入れた。飛騨地方ではあ まり例のない建物である。



を実施したのである。

### 2 - 2 1 県指定・前田家 (142点)



前田家は、上宝村で1、2を争う豪農であり、構えが 大きく意匠も形態も優れている。建物は、栃尾温泉の 東、穂高連峰の西山麓に抱かれた蒲田川沿いの神坂に あった。明治32年、高山の大工によって建てられたも ので、人も馬も、1つの入口から出入りする特殊な形を している。



## 2 - 2 2 県指定・富田家 (218点)



富田家は越中東街道沿いにあった。歴代茂住鉱山の 仕送人として荷物や牛馬の中継を営んでいた。

建物は平入りで、内部は大きく3つに区分され、押 入れはない。狭い「ドジ」へ入ると「アガリタテ」が あって、左に広い「オエ」、その奥には板間の「デイ」 と仏壇のある6畳間の「デイ」がある。「ドジ」の右 手には「マヤ」、「ニワ」があって、2階へ 上がる階段は「ニワ」にある。「オエ」は板 間で、棟下下手寄りに囲炉裏がある。



## 2 - 2 3県指定・加藤歩簫墓



## (44点)

加藤家の墓地は、法華寺山頂上にある。上下 2 段に 区画し、上段に17基の墓石を3列に配置してあるが、 歩簫の墓は第1列の中央に位置し、「清境院幽山白翁 居士」と刻まれている。

歩簫は名を貴雄、通称を小三郎という。蘭亭歩簫、 白翁(晩年)と号した。俳諧を泊庵蝶夢に、国学を伴蒿 蹊に学び、安永元年(1772)家督を相続し、 父の私塾を継承した。

## 2 - 2 4 県指定・赤田臥牛墓



## (37点)

東山大雄寺墓地に赤田家の墳墓がある。東西 3.6m、 南北 5.5m の墓域内に石塔 3、小墳 4 が配置されてい るが、臥牛墳は入口に最も近く、中央に位置し、右に 先霊、左に誠軒(嫡孫)、後ろに章斎(嫡子)の墳墓が ある。各墳とも同大で、環石を設け、中に盛り土がし てある。誠軒の遺骸は大正15年小糸坂からここに移さ れた。章斎墳の右横に修墓の際建てられた標 碑がある。

### 2 - 2 5 県指定・東山神明神社絵馬殿 (105点)



絵馬額(4面)墨絵一部彩色、正保2年(1645)の 願文があるもの、明暦元年(1655)のもの、延宝2年 (1674) のもの、天和2年(1682) の陵王舞楽絵

もと高山城内の月見殿であったが、元禄8年(1695) 高山城破却の際に移築された建物だと伝えられる。こ

の建物には金森藩政時代の絵馬額 4 面が残されてい る。最も古い額には「奉掛御宝前絵馬 自高山城 正保二乙酉歳八月吉日信心願主敬白」とある が、これらの絵馬額はこの建物が移築される 以前から神明神社の社殿に掲げられていた

ものと考えられる。



## 2 - 2 6 県指定・法華寺本堂 (121点)



寛永 9年(1632)、九州の地から配流され、翌年こ の地で寂しく亡くなった加藤肥後守清正の嫡孫光正の 霊を哀れんだ金森重頼(第3代)が、高山城内の建物 を移してこの本堂にしたという。宝暦年間の平面図が 残されている。昭和 45 年~47 年には自火報設備、本 堂の半解体修理を行なった。さらに、平成5年には須 弥壇と内陣の天井、蟇股や欄間彫刻の全面修

理を行なっている。その際、須弥壇脇の6枚 の彫刻と、内陣手前の厚鴨居上端に裏書が確 認された。



### 2 - 2 7 県指定・大雄寺鍾堂 (36点)



大雄寺記に、「鐘楼 第十世超誉白翁大和尚 元禄 二己巳二月建之 四月屋根葺終 棟梁松田又兵衛、古 橋長左右衛門、松山孫太郎、松田長次郎、古橋九右衛 門、葺師越中富山橋本甚兵衛、橋本次右衛門、橋本忠 右衛門」と記載されている。屋根は昭和49年、杮葺で あったのを修理し、銅平板葺に改めた。

二軒・繁垂木の軒廻りでありながら、他は 簡素な手法で建てられる。木割が太くて柱転 びもよく、柱頭貫端の唐草彫刻も力強い。



### 2 - 2 8 荏野文庫土蔵 (94点)



国学者田中大秀の文庫蔵で、荏名神社の境内にあり、 火災と鼠害に備え池の中に建てられている。天保 15年 (1844) 6月29日新始。京都神楽が岡の土を運び、飛 騨国内各社の注連縄を集めて苆(つた、すたともいう) に使ったと伝えられる。上階の前面に明り窓をつけ、 窓の上に大秀自ら「荏野文庫 弘化乙巳秋」としたた めた木額が掲げてあった。

現在、519部1,516冊が県の文化財(典籍) に指定され、飛騨高山まちの博物館で収蔵し ている。



### 2 - 29県指定・田中大秀墓 (65点)



荏名神社から 1km 南方に大きな松樹の生い茂る小 丘がある。大秀が生前松室岡と名づけ、墓所と定めた ところである。曲折した参道をのぼると、芳賀矢一撰 文「田中翁贈位記念碑」の立つ広場に出る。3段の石段 をのぼり、切石道を進む。左右に春日燈籠1対を並べ、 正面に大秀好みの、雅た標碑が立っている。「田中大 秀之奥城」と刻まれた文字は、大秀の筆跡で ある。大秀の遺体は、標碑の後ろの小円墳に 葬られている。



## 県指定・飛騨東照宮 2 - 3 0(143点)



金森第3代重頼が元和2年(1616)、高山城内に徳 川家康を祀った東照宮を奉祀したが、延宝8年(1680) 現在地に遷座した。諸国が勧請した東照宮は、全国で 100 数十箇所を数え、寛永年間(1624~1644) 家光の 東照権現に対する崇敬と幕府勢力の伸張に伴なって建 立されたものが多い。その後金森氏が元禄5年(1692) に出羽へ移封になってからは、荒廃してし まったが、これを嘆いた金森の子孫重任が神 社の再建を志した。



## 2 - 3 1 県指定・三重塔 (65点)



天平13年(741)の詔勅により建立された塔婆も、 弘仁 10年 (819) に炎上し、斉衡年中 (854~857) に 再建した。応永年間(1394~1428)さらに兵火にかかっ たと伝えられる。その後再建されたが、戦国時代金森 が松倉城の三木攻めに際し損傷し、元和元年(1615)、 金森可重が三重塔を再建したと三福寺小池家文書「国 分寺大平釘図」に記録されている。

現在の塔は、寛政3年(1791)大風で吹き 倒されてから31年後、庶民の喜捨浄財金800 両と大工手間 5,500 人工をかけて、文政 4年 (1821) ようやく竣工を見たものである。



### 2 - 3 2 旧三島家住宅 (302点)



岐阜県重要文化財(昭和47年12月13日指定)

白川郷一色村(現在の荘川町一色)の豪農の住宅と して宝暦 13 年(1763 年)に建てられたものである。 当初は寄棟式入母屋合掌造りの萱葺屋根であったが、 明治 11年(1878年) 榑板葺切妻屋根に改造されその 後瓦葺屋根となり、昭和60年(1985年)現在地に移 築された。

## 重要文化財 円空作仏像(聖・千手・龍頭) 2 - 3 3 (77点)



円空は江戸時代前期の僧で諸国を遍歴し、その彫刻 を通して庶民の教化につとめた。かれは室町時代以後、 皮相な自然観に落ち入ってきたわが国彫刻の世界に、 独自の天才を発揮し、偉大な人間の力をしめしてきた 聖者でもある。

山嶽宗教に徹した円空は、つねに山間へき地を巡礼 し、人々の幸福を願い多くの仏像を彫刻して、末永く 人の世をうるおしている。したがって円空の 彫刻はそれ自身個性的であり、端的に、強く また烈しくその真髄を表現し、仏教と芸術の 世界に生きぬいている。



## 2 - 3 4県指定・荘川桜、御母衣ダム (550点)



荘川町は農林業が主な産業で、昭和30年代には、養 蚕が盛んであった。しかし、昭和36年白川村地内に御 母衣ダムが完成すると、ダム湖の南半分が荘川地域に かかり、主要集落のいくつかが水没してしまった。中 野にあった照蓮寺や岩瀬にあった若山家が水没前に移 築され、国の重要文化財に指定された。

また、照蓮寺と光輪寺にあった巨桜2本も 水没地点から、現在の「荘川桜公園」へ移植 された。



## 2 - 3 5県指定・赤保木遺跡 (78点)

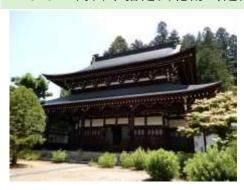


赤保木町は江戸時代、大野郡三枝郷赤保木村といい、 後風土記によると村高 148 石、家数 30、人数 170 人と ある。明治8年(1875)に清見村の大字となり、明治 22年(1889)からは上枝村の大字になった。産土神の 熊野神社周辺には成田正利の墓、国分寺の瓦窯跡、住 居跡など史跡が多い。

古墳群は川上川左岸の河岸段丘につくら れる。



### 2 - 3 6 高山市指定文化財(建造物)宗猷寺本堂 (357点)



基壇上に建ち、前面三方吹抜け、敷石床となった禅 宗様式の強いこの本堂は、文政7年(1824)8月26日 落成され、大工棟梁は坂野半三郎であった。

高山地域唯一の臨済宗寺院の建物で、量感ある外観 を持ち、仏殿や法堂の基本形である敷石床を前面に、 内部を畳敷きとしたことは、その古い形式をよく表し ている。

五山の仏殿や法堂にならって外観を二重 にするとともに、和様や大仏様の手法も取り 入れている。



## 高山市指定文化財(建造物)宗猷寺鍾堂 (86点) 2 - 37



礎石上の柱間が 4m を超える規模の大きな鐘堂で、 四隅の柱頭にある「出組のます組」のほかに中備えと いわれる組物があり、いわゆる「禅宗様詰出組」のま す組になる。

享保年間(1716~35)に、郡代長谷川庄五郎忠崇の 助力で築いたと伝えられる。



## 2 - 3 8 雲龍寺鐘楼門(市指定文化財) (115点)



高山城破却の際、城内の「黄雲閣」という建物を当 寺へ下げ渡されたと伝えられる雲龍寺鐘楼門は、天正 10年(1582)本能寺の変に際し二条城において19歳 で戦死した金森長近の長子忠郎長則の菩提寺として長 近が修営した。

屋根はゆるやかな曲線をもち、頂部に露盤と宝珠を のせる。初層中央通路の両側にふところを設 け、南東側に階段がある。

## 大雄寺山門(県指定重要文化財) (137点) 2 - 3 9



大雄寺は、もと吉城郡上広瀬村(国府町)にあった が、金森氏入国後現在地に移され、浄土宗の道場となっ た。上広瀬には「大雄寺屋敷」という地名が残ってい る。市内唯一の楼門造で、法華寺、宗猷寺の本堂と共 に東山寺院群伽藍の代表的な建物である。

12本の丸柱は太く、カツラ材である。通常のヒノキ やスギではなく、カツラやクリ、マツなど多 彩な木材を使うことも、木材を知り尽くした 飛騨匠の技の大きな特徴である。



### 2 - 4 0法華寺番神堂(市指定文化財) (57点)



法華寺本堂南側に位置し、広い池にかかる石製の太 鼓橋を渡って石段を上がると正面に番神堂建物があ る。外部軒廻りは、出三斗組で平桁の上に大斗をのせ 枠肘木を置き、巻斗の上に秤肘木をのせて木鼻を置き、 その上に実肘木を置いて丸桁を受ける。

向拝の柱は角柱で粽付にて皿斗、大斗で唐様連三斗 組にて象鼻虹梁の上に龍の彫刻を置き、手鋏み、菖蒲 桁を置き、二重虹梁の上に結綿付、大瓶束、 大斗、棟桁を置いた軒唐破風で、兎の毛通で 降り懸魚も菊の花をあしらってある。

## 2 - 4 1 高山市指定文化財(史跡)山岡鉄舟父母の墓 (45点)



鉄舟の父小野朝右衛門高福は、弘化2年(1845)に 江戸御蔵奉行から転じて飛騨郡代となった。

嘉永5年(1852) 閏2月2日、時勢を鑑み上野平で 陣立を行なった。同月27日没、享年78。

鉄舟の母磯女は、夫に先立ち嘉永 4年(1851)9月 25 日病没した。

碑面の法号は、2基とも鉄舟の筆跡である。



## 2 - 4 2 素玄寺本堂(市指定文化財) (134点)



素玄寺は、慶長 13年 (1608) 8月 12日、京都伏見 で没した高山城の初代城主金森長近の菩提を弔うため に、第2代可重が建てた曹洞宗の寺院である。長近の 法号「金竜院殿前兵部尚書法印要仲素玄大居士」にち なんで、素玄寺と称した。

当時にのこる文政 2年 (1819) の書上書によると、 寛永年間(1624~1644)に炎上後、寛永 12 年(1635)高山城三ノ丸にあった評議場が移 築されたとある。



### 津野滄洲墓 2 - 4 3市指定史跡 (38点)

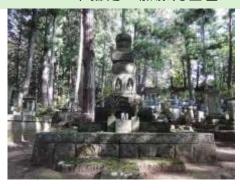


津野滄洲は享保3年(1718)の生まれ、現在の高山 市上二之町に居住し、名を義見、字を有隣、通称を福 島屋五右衛門と称した。また蒲公英主、金華主人、金 華三愛主などと号し、詩歌、俳諧、書画などをたしな んだ。

当時全国的に石器、奇石の収集家として知られてい た近江の木内石亭と交流があり、飛騨におい ても二木長嘯や森桃林らに影響を与えた。



### 2 - 4 4 市指定・加藤光正墓 (64点)



東山法華寺の裏山にある。光正 1 周忌の寛永 11 年 (1634) 7月16日建立、天明年間(1781~1789) -部を修造した。

光正(光広)は熊本藩主加藤忠広の嫡子で、清正の 孫にあたる。寛永 9 年(1632)忠広は参府の途中、品 川で入府を差し止められた。次いで肥後1国を没収さ れ出羽庄内の酒井忠勝に預けられ、光正は飛騨に流さ れた。改易の理由は明らかでないが、江戸で生まれた 子を将軍大喪の折ひそかに国もとへ送った

ためとか、土井利勝が謀反の偽書を諸大名に 回送したとき忠広だけ届け出なかったため とか伝えられている。



## 2 - 4 5 (46点) 森宗弘墓 市指定史跡



森宗弘は文化8年(1811)現在の高山市上二之町の 商家に生まれ、呉服商製糸業、酒造業などを営んだ。

その一方で自然科学への関心が高く安政年間に起き た地震や、安政5年(1858)に出現したドナチ彗星の 記録などを残しており貴重な資料となっている。

安政6年(1859)3月10日、49歳で京都にて没し

ここは一族の墓域で墓に向かって右から 4 番目が宗弘とその妻の墓である。戒名は釈道 弘居士である。



## 2 - 4 6 川上別邸史跡公園 高山市指定文化財 (140点)



この地は、金森左京(重勝・金森氏第3代重頼の弟) の屋敷があったところで、当時の面積は現公園の 4倍 近くあったと考えられる。その後町年寄の川上斉右衛 門の別邸になり、さらに平田、小森家の所有となった。 両家では、由緒ある川上別邸の庭、土蔵等を後生に残 すため、平成10年12月、高山市へ土地建物一式を寄 贈された。平成 13 年、庭園全体の整備工事 と土蔵の屋根、板壁修理、稲荷社の修理、公 衆便所と 40t 貯水槽の新築工事を行なった。

## 2 - 4 7 木地師の集団墓地 (45点)



轆轤を使い、木材から椀・鉢・合子などの日用器物 を造る手工芸者を木地師という。原材を山間に求めて 漂泊した。伝承では、弟に立太子を先んじられ近江小 椋郷に隠棲した、文徳天皇の第1皇子惟喬親王を業祖 とする。

木地師の墓は山間の住居近くに残すのが普通である が、宗猷寺には93基の墓が1集団をなして いる。禅宗帰依の木地師の寺請を宗猷寺(臨 済)が扱っていたためである。宝永 8 年 (1711) 6月在銘の墓が最も古い。



## 2 - 4 8 東照宮境内遺構 (154点)



所在地 西之一色町3丁目1004番地1他 東照宮 所有者 江戸時代 1箇所 平成 30 年 3 月 29 日 高山市指定史跡

- 1. 社務所(客殿)
- 2. 旧松泰寺墓地
- 3. 神池·神橋

構成文化財一覧

- 4. 金龍神社
- 5. 金龍神社跡地
- 6. 手水舎
- 7. 石段
- 8. 灯籠



## 2 - 49市指定・東照宮本地堂

# (54点)



文政7年(1824)、郡代の芝正盛が願主になり、陣 屋出入の大工小峠平吉によって建てられた。当初、東 照宮祭神の本地仏である薬師如来を祀るために建てら れたが、明治の神仏分離により、現在は稲荷社、菅公 廟になっている。

木割りが太くて形態も美しい。方形造りに向拝をつ け後側に下屋を配した様式は、この地方では 珍しい。

昭和57年、セメント瓦がもろくなったた め銅板葺に改め、土台の一部も修理した。

## 2 - 50市指定・国分寺鐘楼門

## (40点)



屋根はもと杮葺であったが、昭和30年に銅板葺とし た。屋根の軒は1つ軒、まだら垂木、妻は木連格子。 上層は円柱、簡素で力強い組物を持ち、勾欄を廻す。 下層は角柱6本、面取りがある。

梵鐘は永正 11年 (1514)の古銘を存し、もと荒城郷 三日町十王堂の鐘であった。宝暦 14年(1764) 大萱村 横山作助が、改鋳して当山に寄進した。

## 2 - 5 1 国分寺表門 (61点)



元文4年8月、飛騨代官長谷川忠崇の手代小林儀右 衛門ら4名の寄進により、飛騨の名工松田太右衛門が 建てた。

冠木上に架せられた板蟇股や、腕木の繰り形にこの 地方中期の好例を残しており、形態も美しい。当初基 壇がなく、地表面上に建てられていたが、保存のため 基壇が設けられた。昭和 53 年にはのし板葺 であった屋根も現在の銅板葺に改められた。



### 2 - 5 2 わらび粉小屋 (75点)



飛騨の東部、阿多野郷の内19ヶ村、東北部の下高原 郷の内7ヶ村は明治初めまで米ができず、稗を主食と していた。これらの村の人々は豊富にあるわらびの根 を掘って粉砕し、澱粉を作って売り、現金収入を得て 暮しをたてていた。

この作業小屋は、益田郡阿多野郡中洞村(現高山市 高根町中洞) から移築したもので、子の原高 原から落ちる水を利用して水車を廻しわら び粉の採取期にはこの小屋に移住して(山 居)作業をした。



# 2-53 旧八月一日家住宅 (64点)



旧八月一日家は、白川郷三尾河(現高山市荘川町三 尾河)にあった西願寺の庫裏として江戸時代末期に建 てられたものである。入母屋茅葺屋根の妻側に鼻小屋 という採光、換気のための窓が設けられ、幅の広い縁 など荘川造りと言われる形態をしている。

■「八月一日」の名の由来

旧暦の八月一日は現在の9月10日頃に当る。飛騨地方ではこの頃になると栗・稗などの雑穀が実り穂を摘んで収穫したことから、八月一日と書いて「ほづみ」と読ませた。



# 2-54 木挽小屋・杣小屋 (154点)



木挽は大鋸を用いて製材にあたる職人で、江戸時代 には杣(伐木)・日用(運材)と対置される林業職人 で、三者は分業化していた。

この小屋は、木挽が寝食をしていた小屋である。中央の土間は炉で両側の大きい木は、おくらぶちと言い、また通路でもある。桁は入山、出山と言う方法で組まれ、鳥居造りで、垂木は右前合せとなっている。

# 2-55 立保神社拝殿舞台 (54点)



吉城郡河合村大字保にあったもの。立保神社は、吉城郡河合村大字保(吉城郡小鷹狩郷保)の産土社で、鈿女神社・白山神社・国作大神社の3社を合祀した神社。3社の拝殿を集め、2つを上下に並べ、上を拝殿(5.5m×5.6m)、下を舞台(7.4m×5.5m)として使い、もう1つを神饌殿(5.6m×4.7m)としたもの。この地では、拝殿と舞台は元の形に、神饌殿は楽屋として花道(2.2m×8.5m)でつないだ。



# 2-56 市指定・松倉観音 (224点)



元禄 5 年 (1692) 領主・金森頼告が出羽国 (山形県) 上之山へ移封された後、故あって高山を離れ京都の泉 涌寺に入っていた天電高幢和尚が帰郷し、松倉山窟に 馬頭観音の堂を建てた。これが普門院といわれている。

松倉観音は素玄寺の守護により旧暦 7月9日近郷の村人が堂の内外に宿泊し養蚕の繁栄を祈り、翌10日は村々の馬を飾り参詣し、牛馬の無病息災を祈願した。

この風習が現在も松倉絵馬市として残されている。この建物は普門院、大悲閣、お籠堂からなり、通称松倉観音堂といわれている。



## (81点) 2 - 5 7 市指定・天然記念物 法正寺の枝垂桜



目通り 4m、樹高推定 14m で、樹齢は 4 百年を重ね る。法正寺の歴史をそのまま刻むかのように、根元は コブ状となり、長年の風雨に耐えている。



## 2 - 5 8 田上家住宅(市指定文化財) (180点)



田上家当主田上太郎四郎が、日下部家住宅を造った 川尻治助に依頼した農家建築で、明治 15(1882) 年に 建てられた。完成までに 12年の歳月を要したといわれ る。

主屋は桁行 12.5 間、梁間 7.5 間と大規模。建物は木 造2階建ての切妻造で平入であり、屋根は現在瓦葺き である。主屋正面は真壁のデザインを基調と しつつも隈切り窓を入れ、近代の様式も取り 入れている。屋根と小庇がせり出し、屋根の 軒は「せがい造り」。



## 2 - 59旗鉾伊太祁曽神社 (154点)



乗鞍岳の西に広がる地域の人々は、日の登る山、乗 鞍を信仰してきたが、いつの頃からか伊太祁曽を祭神 とするようになり、氏神としてまつるようになった。

伊太祁曽のほかに日抱尊などの呼び方があり、大日 如来をまつり乗鞍権現とも呼び、干ばつの時はたくさ んの人が、みの笠をつけて、鐘や太鼓を鳴らしながら 登山し、雨乞いをした。



### 2 - 6 0 高山市指定文化財 千鳥格子御堂 (83点)



今からおよそ350年前慶長元和の頃、この地区の了 宗寺を建てた名工飛騨匠某が、その餘材で旧軽岡峠の 辻に地蔵堂を造った。その地蔵堂の格子は檜の角棒を 互いちがいに組んであるが、どこでどのように組み合 わせたものか、外見では全くわからない立派な細工で、 少しのくるいもなく、その出来映え妙に感心し、千鳥

格子と呼ばれている。この地蔵堂は、昭和34 年の新軽岡峠開削、平成4年の軽岡バイパス の開通にともない、旧軽岡峠の辻から新軽岡 峠口を経て現在地へ移された。



## 江馬輝盛の墓 高山市指定文化財 (139点) 2 - 6 1



江馬氏は高原郷(現神岡町)に本拠を置く豪族で、 1582年飛騨の平定を目論み、大阪峠を越えて八日町の 梨打城に入り、古川盆地に進出しようとした。それを 阻もうとする三木自綱・小島時光・牛丸又右衛門の連 合軍と、八日町荒城川をはさんで激しい戦いを展開し

この戦いは三木連合軍の勝利に終わり、江馬輝盛は この地で討ち取られ、16代つづいた北飛騨の 名門江馬氏もここに滅んだ。ここで討ち死に した江馬輝盛を哀れに思った安国寺のお坊 さんが建てたものと言われている。



## 2 - 6 2 下呂市天然記念物 位山八幡神社の社叢 (78点)



創建年代は不詳であるが、国説に、第16代仁徳天皇 の65年、飛騨国両面宿儺追討の勅命を奉じた武振熊命 は、進軍の各所で先帝応神天皇の尊霊を奉祀し、戦勝 を祈願された祭場遺蹟であろうと称せられる。中津原・ 乗政・森・久津・一宮・石浦・高山等と共に「飛騨八幡 八社」の1であるとも伝えられている古社である。

創建以来の記録は少なく、棟札には文政 10 年・嘉永元年・大正2年等に、拝殿を再建し たことがわかる程度である。



### 2 - 6 3 旧山岸写真館 (26点)



当建物が建つ辺りは江戸時代初めには高山城の登り 口にあたり、木戸や武家屋敷が置かれていた場所であ

創業者の山岸喜一は、明治 17年 (1884) から高山で 写真館を営み、その息子喜久蔵も跡を継いだ。当地へ は大正7年(1918)に移転し、当建物は昭和 37年まで写真館として使用されていた。

通称城坂の登り口、西側に東面して建つ木 造2階建てである。



## 2 - 6 4 飛騨民俗村山岳資料館



# (199点)

この建物は、明治36年、大野郡灘村(現高山市桐生 町) に建てられたものである。地元の近代建築を多く 手がけた8代目坂下甚吉の施工。わが国における様式 気象観測は、横浜などの開港場にきていた外国人や工 部省、北海道開拓使庁などのお雇い外国人によって始 まっている。

高山市は、北アルプス飛騨側の登山基地でありなが ら、山岳資料を展示する施設がなく、昭和45 年の測候所改築に際して、この建物は飛騨民 俗村に移築され現在は山岳資料館として活 用されている。



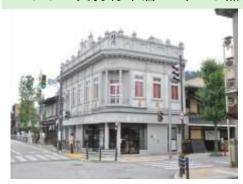
## 2 - 6 5 山桜神社火の見櫓 (223点)



山桜神社社殿の南側建物の小屋梁上に柱を建て、棟 上に櫓を組んでいる。櫓の袴底部は、3.4m 四方、高さ 7m規模、三層建で、東部に宝形造の見張小屋を置き、 明治14年製造の半鐘を吊っている。神社の絵馬市とと もに親しまれている。

当建物は、旧高山市内中心部に位置する商店街・本 町通り内に立地し、山桜神社に付随する。

## 2 - 6 6 天狗総本店 (118点)



飛騨の本格的精肉店。外観2階で、一見城館のよう なデザインをもち、上部は当初の姿を残しているが、 下階は外観・間取りに手が入っている。

故山口倍次郎が、地元大工棟梁・西田清に建てさせた。 北陸の金沢、富山等の大きな精肉店にあやかって「天 狗」の屋号を用いた。この肉と天狗との結び付きは、

食物の洋風化が始まった明治初期に京都で 『肉料理大天狗』という書物が出ていること が源といわれる。外観は洋風だが、内部は木 造和風。



### 2 - 6 7 お美津稲荷 (127点)



昔、上呂サイラノにお美津という美女に化けるのが 得意な狐がいた。2百年程前の古文書によると、お美津 狐や飛騨中の古狐 10 匹などが高山石浦在浄見寺野で 集合し、連れ添って故郷サイラノに帰る道行が記され ている。

この縁により、地域の有志が稲荷の御堂を建てたが、 この工事中に土中から白蛇 2 匹が現れたの で、白龍山お美津稲荷と称し、お美津の大碑 を始め、夫婦の小糸坂小法師など十傑が寄進 され、現在も連立している。



### 2 - 6 8 棲霞山 歓喜寺 (72点)



歓喜寺は明暦2年(1656)の草創で、開基治部郷明 了師は照蓮寺(高山別院)第13世宣明師の第2男であ る。

明了師は元和5年(1619)宣明師の第2男として生 まれ、幼名を小輔、または治部郷ともいう。寛永 11年 東本願寺宣如上人の得度を受け、明了と改名された。 父宣明師の幼名である。



# 2-69 大桑城 (461点)



## <大桑跡と城下遺跡群>

地元では城山と呼ばれている。山頂一帯には戦国時代の山城の跡が残り、麓の大桑区には城下町を守る堀と土塁「四国堀跡」や、館・寺・屋敷地の伝承が点在している。発掘調査では弥生後期から現代まで存続する伝統的集落と、戦国期の城下都市、その両方の存在が確認される。

# 2-70 美濃土岐氏、多治見の大畑時代 (219点)



長近の父定近は、美濃国守護、土岐氏の氏族であった。土岐氏は平安時代、岐阜市茜部周辺で活動していた源氏の一族で、鎌倉時代初めまでには土岐郡(瑞浪市)あたりに住み、土岐氏を名乗る。南北朝の争いには北朝の武将として足利尊氏のもとで功績をあげ、美濃国の守護になった。その後、力が弱まり、最後は斎藤道三によって美濃国から追い出され、土岐氏の時代が終わっている。

## 2-71 名古屋城 (375点)



名古屋城は、御三家筆頭尾張徳川家の居城であり、初代の城主は、江戸幕府を開いた徳川家康の第九男義直である。慶長 14 年(1609)、家康みずから築城を決定し、翌 15 年に石垣普請が着工され、17 年に大小の天守や各櫓が完成した。普請を命じられたのは加藤清正ら西国の大名 20 名で、城内の石垣には目印として各大名が刻んだ刻印が多数残っている。

# 2-72 飛騨高山の城主 金森長近 (229点)



金森長近は大永 4 年(1524)美濃国で生まれ、大畑家の次男として一家で金ヶ森に移って来る。その後 18歳まで居たとされている。そして織田信長の桶狭間の戦いに参戦、金森長近と名乗るようになった。信長の死後、豊臣秀吉に仕え再び戦功をあげて飛騨の国の城主になる。



### 2 - 7 3岐阜城 (471点)



岐阜城跡は、金華山(稲葉山)に築かれた山城で、稲 葉山城、井口城とも呼ばれていた。戦国時代に美濃国 を治めた斎藤氏の居城であるとともに、織田信長が天 下統一の拠点とした城としてもよく知られている。

建仁年間(1201~1203)頃に二階堂氏が最初に城を 築いていたと言われているが、実態は不明である。大 永5年(1525)頃、ここが守護方と長井氏の 争いの舞台になったため、少なくともこのこ ろには城として利用されていたと考えられ



## 越前大前城跡 (596点)



越前大野城跡は、大野盆地の西側に位置する標高約 250m の亀山と、その東側に縄張りを持つ平山城跡で ある。織田信長の部将、金森長近により天正年間(1573) -1593) の前半に築城された。

越前大野城は亀山を利用し、外堀・内堀をめぐらし石 垣を組み、天主閣を構えるという中世の山城にはみら れなかった新しい方式の城であった。

江戸時代の絵図には、本丸の望楼付き 2層 3階の大天主と2層2階の小天主・天狗櫓な どが描かれている。



### 2 - 7 5 金森左京家 (201点)



金森本家の始祖金森長近の後に本家二代となった金 森可重は、高山市の北部にある高原郷に勢力を持って いた江馬氏十六代の江馬輝盛の娘を側室としていた。 その側室が生んだ子が可重の五男、重勝である(富田 礼彦編『斐太後風土記』)。

彼は父可重に従い、異母兄の三男重頼とともに大坂 冬の陣・夏の陣へ出陣した。その後元和元年 (1615) 七月、兄重頼が父可重の領知を継承 し、飛騨国を領有した。



## 安土城下の金森屋敷跡



## (243点)

滋賀県近江八幡市安土町下豊浦

織田信長が安土城築城を命じたのは天正4年(1576) 正月のことである。信長は同年2月に岐阜より安土城 に移り、天守閣を5年で完成させている。安土城下は 楽市楽座でにぎわい、武家屋敷も短期間に整備された。 しかし、天正 10年(1582)、本能寺の変で天守閣は焼 失してしまった。

信長の重臣であった金森長近は安土城下 に武家屋敷を構えていたが、その場所は長い 間わからなかった。



## 2-77 本能寺跡 (29点)



天正 10年 (1582) 6月2日、明智光秀が謀反を起こ して、京都本能寺に宿泊していた主君織田信長を襲撃 した。包囲された信長は、寺に火を放ち、自害して果 てた。

信長の嫡男織田信忠は、妙覚寺から二条御新造に退 いて戦ったが、万策尽きて自害した。長近の嫡男忠次 郎も二条城で一緒に亡くなっている。



## 松倉城 (266点) 2 - 78



高山市街の西南、標高 856.7m の松倉山頂に構築さ れた山城である。高山盆地を眼下に見下ろし、北は越 中、南は岐阜、東は木曽、西は郡上に通ずる街道を一 望のうちにおさめることができる。

本丸 内曲輪の4方と外曲輪の西側・南側に石垣が 現存する。

二之丸 本丸東にあり、南側に旗立石と俗称する巨 岩がある。東側・南側に石垣が残存する。

三之丸 本丸南にあり、西側・南側に石垣、 西南隅に1段高く角櫓跡がある。

## 2 - 7 9 (406点) 高山城



高山市街の東方にあって標高 686.6m、通称城山、別 名を臥牛山、巴山ともいう。

金森入国以前は、「天神山城」と呼ばれた。飛騨の守 護代である多賀出雲守徳言によって、文安年中(1444 ~1449) に築城され、近江の多賀天神を祀ったことか ら多賀天神山、城は多賀山城と呼ばれたという。永正 年間(1504~1521)には高山外記が在城して いた。

## 2 - 8 0照蓮寺本堂(国指定重要文化財) (253点)



浄土真宗の寺院では日本最古の建物といわれ、昭和 35 年に合掌造りで有名な荘川村 (現在の高山市荘川 町)から、高山城二の丸跡へ移築された。永正年間 (1504年から1521年)の建立と伝えられるこの本堂 は、書院造を基調として、道場発祥の過程を物語る。

かつては荘川村中野にあり中野御坊と呼ばれてきた が、御母衣ダムが建設されることになり、昭 和 33 年~35 年にかけて現在地に移築され た。



### 2 - 8 1 伏見城 (363点)



伏見城の位置は宇治川を望む通称「指月の丘」の中 心地であることから、「指月伏見城」とも呼ばれ、文禄 元年(1592)に豊臣秀吉が隠居屋敷として築き始めた ものを、秀頼が誕生した後の文禄3年(1594)に本格 的に城郭としたことに始まる。同時期に各大名はじめ 家臣である武将たちの屋敷も形成されていき、文禄 4 年(1595)にはほぼ伏見城下町として機能し ていたと考えられる。

## 2 - 8 2 小田原合戦 (404点)



天正 18年 (1590) 4月、戦国大名小田原北条氏の本 拠地小田原城は、全国統一を推し進める豊臣秀吉の大 軍に包囲されました。

北条氏は、中世的ではあるものの、優れた領国経営 を行なっていました。そして、その本城である小田原 城は、堀と土累で城と城下を取り囲む戦国最大規模の 中世城郭で、「土の城」でした。かたや秀吉 が本陣を構えた石垣山城は、東国で最初に築 かれた総石垣の近世城郭であり「石の城」で



## 2 - 8 3 肥前名護屋城(佐賀県唐津市)の金森氏布陣場所 (480 点)

した。



秀吉は、天正 19年 (1591) 8月、「唐入り」を翌年 春に決行することを全国に告げ、肥前の名護屋に前線 基地としての城築造を九州の大名に命じた。秀吉は自 分の地元尾張・那古野(氏)と同じ肥前・名護屋(氏) (古くは名久野) という地名を奇遇に感じ、城の立つ 山の名前が勝男山と縁起がいいことにも気をよくし、 この地への築城を決めている。

## 2 - 8 4 関ヶ原の合戦場・金森氏の婦人場所 (529点)



西暦 1600 年 9 月 15 日、日本列島のほぼ中央、東西 交通の要に位置するここ関ケ原において、天下分け目 の戦いが繰り広げられました。天下の覇権をねらう東 軍・徳川家康と、家康の野望を阻止せんとする西軍・ 石田三成の雌雄を決する関ヶ原の戦いは、この関ケ原 盆地において東西両郡あわせて約 15 万人の将兵の激 突となりました。

笹尾山は西軍の総大将・石田三成が本陣を 構えたところです。



### 2 - 8 5 大阪の陣・金森氏の配置場所 (776点)



- 大坂冬の陣は、慶長 19 年 (1614) 10 ① 冬の陣 月、豊臣側では戦争準備に着手し、全国から浪人を集 めて召し抱え、その兵力は10万人に及んだ。
- ② 夏の陣 和平成立後、家康は駿府へ、秀忠は伏 見に戻ったが、一方で戦争準備を行なっている。

応仁の乱以来、150年余にわたって続いた戦乱の世 が、慶長 20 年 (1615) 5 月の大坂夏の陣で 終わったことを指す。江戸幕府は、この年、 元和と元号を改めて、天下の平定が完了した ことを知らしめた。



## (415点) 2 - 8 6 駿府城下の金森屋敷



城下町の町割は駿府城の拡張計画とともに立てら れ、駿府城が完成する慶長十三年八月までに城下町の 建設が進展したと考えられている。

駿府城下町の建設は城下町を安倍川の氾濫から防護 し、駿府城を堅固にすることと不可分であった。安倍 川を城下の西側に固定し、安倍川に駿府城の外堀の役 割をもたせた。

こうして駿府城下町が建設されたが、江戸 時代の城下町は武家とそれ以外の商人・職人 との居住区が区分された。

### 2 - 8 7 金森氏第4代頼直の菩提寺・大隆寺 (131点)



- ○承応2年(1653)、第4代金森頼直が創立、開山は 京都紫野大徳寺前住「禅海宗俊」。京都金龍院の末 寺となる。臨済宗としての大隆寺である。
- ○第3世乾舟妙一も大徳寺の前住で、書画をよくした。 瀬戸の陶工加藤源十郎を同道。
- ○金森氏転封後は荒れてしまい、元禄5年(1692)か ら宝暦 12年 (1762) までの 70年ほど無 住、その後、留守居の道心坊は騒客を招く などして、遊戯道場となった。



### 金森長近を祀る高山市の金龍神社祭礼と城山の銅 2 - 8 8 (221点)



■金龍神社

金龍神社は、芝郡代が長近の法号にちなむ「金龍権 現」の神号を得て、東照宮境内に勧請したのが始まり と言われる。

## ■東照宮

元和5年(1619)金森第3代重頼は、高山城の中に 東照権現社を勧請した。その後寛永 5 年 (1628) 、現東照宮境内地(本地堂の下方。 西之一色村鴻巣の森尾崎と言った)に遷座し た。これが東照宮の始まりである。



## 飛騨から山形へ国替え (194点) 2 - 8 9



金森氏第六代頼旹が転封を命ぜられたのは、元禄 5 年(1692)7月28日。同年8月18日、関東郡代伊奈 半十郎が飛騨代官兼務となった。高山城在番を命ぜら れたのは金沢藩主前田加賀守綱紀で、在番奉行を永井 織部正良としている。

永井は10月3日、高山城の引き渡しを受け、半年交 替で第六番まで続け、第六番奉行の和田小右 衛門の時、高山城は破却の命を受けた。

## 金森家累代供養塔-金森家殉死者の墓 (61点)



京都へ改葬された金森家の墓地跡に立つ供養塔の左 右に、主君に殉死した家臣の墓石が集められている。 向かって左の内側の2基は、元和元年(1615)閏6月 3日没した金森家第2代可重に殉死した森石衛門九郎 政吉と山蔵縫殿助宗次のもの。外側のもう 1 基は、正 保4年(1647)8月7日に没した金森家第3代重頼の 9 男重利に殉死した野田源五左衛門清次のもの。

供養碑の右側の 4 基は、慶安 3 年 (1650) 4月7日に没した重頼に殉死した平岡三郎兵 衛忠勝・遠藤右京頼忠・大野瀬兵衛長矩・西 塚三郎左衛門忠明のものである。



## 金森長近の美濃市城下町 (431点)



美濃市の町並みは国の「重要伝統的建造物群保存地 区」に選定されている。東西方向の 2 筋の街路と南北 方向の4筋の横丁からなる町並み。「目の字通り」と いわれる。

金森長近は関ヶ原の戦いの功績で、美濃上有知2万 5千石と河内国金田3千石の領地を拝領した。



# 2-92 金森氏6代頼旹、第7代頼錦の郡上八幡城下 (604点)



元禄10年(1697)6月、幕府は金森頼旹に出羽国上 山から、美濃国郡上八幡へ所替えを命じた。郡上郡百 21 か村(村高2万4千石)と越前国内で69 か村(村 高1万5千石)の合計3万9千石を治めることになっ た。元禄5年(1692)7月、飛騨高山から上山へ移り、 5年で再び郡上に国替えとなったのである。



### 2 - 9 3金森氏第6代頼旹、第7代頼錦の菩提寺 (213点)



臨済宗妙心寺派 鍾山 慈恩護国禅寺

当寺は戦国時代末期、八幡城主遠藤但馬守慶隆公深 く禅門に帰依され、京都花園妙心寺に定慧円明国師(南 化玄興禅師)を訪ね、その弟半山紹碩禅師を当地に迎 えて教えをこわれ、慶長 11年 (1606) 国泰民安を祈願 して建立、半山禅師を創建開山と仰がれる御本尊は、 釈迦如来である。寺内に但馬守嫡男長門守慶

勝公及び生母智勝院殿の塔所を建立し、当寺 を長州公の菩提所と定め但馬守の学問所と される。



# 岩手県盛岡の金森氏遺構(第7代頼錦の菩提寺) (605点)



金森兵部は少輔頼錦と言い、美濃郡上藩 (現岐阜県) 38,000 石の藩主であったが、宝暦 8年(1758)に領民 騒擾の責任を幕府から問われ、領地没収の上、盛岡藩 へ御預けになった。

盛岡藩では、城下内丸に新たに屋敷を構え、御附役 を配して厚遇していたが、宝暦9年2月の流謫から4 年余り過ぎた同 13年(1763)6月に病死し ている。享年51歳。埋葬地は、法泉寺の墓所 であったこの場所で、碑はこの時に建てられ

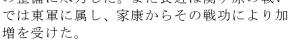


### 2 - 9 5金森氏改易後の金森左京・武生市白崎支配 (162点)

たものである。



ここは金森家の分家である金森左京家の陣屋址であ る。金森家の初代である金森長近は信長・秀吉・家康 に仕えた戦国武将で、信長の時代には越前大野を支配 する大名となり、大野城の築城や大野の町づくりに努 めた。秀吉に仕えた長近は飛騨国 38,700 石余を統治 し、大野での経験をもとに高山城築城や高山の城下町 の整備に尽力した。また長近は関ヶ原の戦い





## 守山市の矢嶋町などの史跡と琵琶湖 (545点)



守山は古来、東山道の宿駅として栄えた。江戸時代 に入り、東山道から中山道に改められた。寛永 19 年 (1642) 守山宿は、徳川幕府より、中山道の正式宿場 としての制札が下され、認可された。中山道は板橋(東 京都) から守山までの 67 次で守山は最終宿場であっ た。



## 江戸・桜田門通の金森屋敷跡 2 - 97(676点)



東京の国立公文書館に江戸の城下絵図が何点かあ り、その中に金森氏の屋敷が見られる。第Ⅰ期・桜田 通りの金森屋敷、第Ⅱ期・桜田通りと芝の両方にあっ た金森屋敷、第Ⅲ期・芝の金森屋敷のみの種類がある。 「金森出雲」は金森第2代可重か第3代重頼。「金森 万之助」は第6代頼旹と思われる。



## 2 - 9 8 江戸・芝の金森屋敷跡 (410点)



太政官布達公園 日本で最も古い公園の一つ 芝公園 公園がまだなかった江戸時代、江戸は庭園都市と呼 ばれるほどに多くの庭園があった。しかしこれらは大 名や旗本などの屋敷がほとんどで、江戸庶民にとって 身近に楽しむことができた緑にふれあえるレクリエー ションの場としては、寺社境内や徳川吉宗が設けた数 少ない花見の名所などであった。

# 2-99 日光東照宮ほか2件の金森寄進の灯篭 (395点)



光東照宮、上野東照宮、亀戸東覚寺の燈籠

- ①日光東照宮内・陽明門下方の中神庫前に金森重頼寄 進の灯籠が並ぶ。金森重頼寄進の灯籠の右に中神庫、 左に上神庫がある。
- ②上野の東照宮に、金森頼直寄進の燈籠が現存する。
- ③亀戸東覚寺に金森頼旹寄進の燈籠が現存する。上野 の寛永寺から移された。

### 2 - 1 0 0 京都の金森氏菩提寺(大徳寺の塔頭龍源院) (218 点)



大徳寺の塔頭の一つで、大徳寺南派の本庵である。 文亀2年(1502)に大徳寺第72世住職・東渓宗牧 を開山として、能登(現在の石川県)の領主・畠山義元 が豊後(現在の大分県)の大友義長らとともに創建し

方丈、玄関、表門(すべて重要文化財)はいずれも創 建当初のもので、方丈は大徳寺山内最古の建 物と言われ、禅宗の典型的な形式を示してい る。



## 2 - 1 0 1 京都天寧寺(金森宗和の菩提寺)、宗和の茶室・真珠庵庭玉軒 (70点)



山号は萬松山と号し、曹洞宗に属する。

当寺は、もと会津(福島県)城下にあったが、天正年 間(1573~1592)に、天台宗松陰坊の遺跡と言われる この地に移転されたと伝えられている。その後、天明 の大火により堂宇を焼失したが、本堂は文化 9 年 (1812) に、書院は天保 14年(1842) に再建された。

本堂には、仏師春日作と伝える本尊釈迦如 来像を、観音堂には後水尾天皇の念持仏聖観 音像及び東福門院の念持仏薬師如来像を安 置している。



## 2 - 1 0 2武野紹鴎から千利休、宗和へとつながる遺構 (499点)



南宗寺は、臨済宗大徳寺派の禅寺で、戦国時代、堺 を支配した武将、三好長慶が父元長の霊を弔うため弘 治3年(1557)に大林宗套を迎え、今日の宿院あたり に寺を開いた。その後大坂夏の陣(1615)にて他の寺 院とともに焼失したが、当時の住職澤庵によって現在 地に再建された。境内には茶道を完成させた千利休や 師武野紹鷗の供養塔などがある。また国名勝 の枯山水の庭、八方睨みの龍の描かれた仏 殿、山門・唐門は国の重要文化財に指定され ている。



### 2 - 1 0 3 金閣寺・夕佳亭 (宗和の茶室) (297点)



金閣寺

鹿苑寺は、ユネスコ (国際連合教育科学文化機関) で採択された世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関 する条約に基づき、「古都京都の文化財」のひとつと して世界遺産リストに登録された。このことは、人類 全体の利益のために保護する価値のある文化遺産とし て、特に優れて普遍的価値を持っていること を国際的に認められたことになる。

### 2 - 1 0 4 越中街道 (610点)



延宝3年(1675)、数万の餓死者をここに埋めたも ので、万人坑と呼び、後万人講と書くようになった。 元和元年(1681)、盲人色都が餓死者の供養塔を建て

笠のある大きな石塔は、水難除けの祈りを込めて、 文化 14年(1817)、法華寺日在が再建したもの。「南 無三世諸仏 | とある石塔は、寛政8年(1796)、 小八賀郷大谷村荒川久治と雲龍寺存妙が大 原騒動刑死者の霊を慰めるために建立した。



# 2-105 飛騨鰤 (409点)



高山では毎年、12 月 31 日の大みそかの夜に「年取り」という行事をする。12 月 31 日に一つ年を取るということを祝う行事である。昭和 30 年代までは、「数え年」で年齢を数え、生まれたその年にまず 1 歳、その年の 12 月 31 日に 1 つ年を取って 2 歳と数えた。12 月 30 日に生まれた赤ちゃんは翌年 1 月 1 日には「数

え」で 2 歳ということになった。12 月 31 日 に年を 1 つ取ったのである。それで 12 月 31 日には年を取る祝いを盛大に行い、その時に出世魚であるぶりをおいしく食べる。



# 2-106 平湯~高原道、中尾峠、安房峠 (677点)



## ■平湯街道

江戸時代における飛騨国の国境は、標高が三千 m もある山脈の屋根上にある。厳しい山脈に四方を囲われている飛騨だが、東の江戸へ、南の尾張へ、西の越前へ、北の越中へと、物資運搬や人の移動には街道が必要であった。

# ■高原道、中尾峠

高山から平湯へは平湯街道だが、平湯で安 房峠を越えて信州への道と、北方向に折れて 神岡方面に向かう高原道があった。現在、旧 街道沿いに国道 471 号が走っている。



# 2-107 岐阜、尾張、京都街道、東海道 (985点)



尾張街道は、その名の通り尾張方面へ行く道で、金森時代になって整備されたが、時代によって、また、古絵図、地図によって街道名が違っている。高山が所属する郡は大野郡であったが、南隣の郡は益田郡といったので益田街道とも呼称する。また、川に並行して進む道を筋といい、益田筋ともいった。

この道は高山から名古屋へ通じ、宿駅は 11、里程は38里である。急げば4日、普通 5日である。名古屋からは、東海道に乗り、 名古屋から京都まで38里の道程となる。



# 2-108 郡上白川街道 (456点)



## ■向牧戸城跡

向牧戸城は、寛正の初め(1460)、将軍足利義政の命を奉じた内ヶ島上野介為氏が、信濃国松代から白川郷に入り、当地に城を築き、白川郷はもとより川上郷、小鳥郷、さらには越中国砺波までを領する勢力の拠点となったところである。



## (1095点) 2 - 1 0 9 江戸街道



飛騨から野麦峠を越えて江戸へ通ずるこの街道は、 江戸まで 43 次 85 里(約 337km)で、山口は最初の宿 場になっていた。このうち山口町森下から水呑洞まで の約6kmは古い街道の姿をよく残し、史跡に指定され ている。

高山を出て最初の山越の美女峠は、もと益田郡と大 野郡の堺で郡上堺といわれ、それが「びじょ うげ」から美女峠と変わったと言われ、また、 この峠に伝わる八百比丘尼の伝説からこう 呼ばれるようになったのかもしれない。



## 2 - 1 1 0 乗鞍岳 (447点)



標高 2,700m付近まで自動車で登れる乗鞍岳は、三つ の火山体が重なりあってできている山の総称で、23個 にもなる標高 2,500mを越える高峰が南北に延々数 km も連なっている。

乗鞍火山の噴出物は、標高 2,400m付近まで分布する 基盤岩類の上にわずか 500~600mの厚さで載ってい る。また凝灰岩などの火砕岩類が少なく、お もに安山岩質~デイサイト質の溶岩からで きていることを特徴としている。



## 2 - 1 1 1 乗鞍山麓 五色ヶ原の森 (170点)



高山市乗鞍山麓五色ヶ原の森は、北アルプス乗鞍岳 の北西山麓に広がる、中部山岳国立公園の南端にある 約 3,000 haの広大な森林地帯で、山地帯から亜高山帯 にわたる植生は、ブナ・ミズナラ・サワグルミなどの 広葉樹林や、シラビソ・オオシラビソ・コメツガなど の針葉樹林が主体となり、可憐な花を咲かせる希少な 山野草も多数確認されている。

また、乗鞍岳を源とする多くの渓流と滝・ 池・湿原、さらに多種の獣・野鳥・昆虫など の野生生物が生息し、四季折々、自然の多彩 な表情を見ることができる。



### 2 - 1 1 2 御嶽山 (427点)



御嶽山は、信仰の山として知られ、昭和54年(1979) 10月28日未明には突然長い眠りからさめて水蒸気爆 発を起こし、有史以来の活動として多くの人を驚かせ た火山である。

御嶽火山の活動は30万~20万年前に始まり、数万 年の期間をもつ活動期と静穏期を2回ずつ繰り返して いる。2回の活動期でできた火山をそれぞれ 古期御嶽火山、新期御嶽火山と呼ぶ。

## 2-113 笠ヶ岳 (425点)



高山市街地から北アルプス方面を眺めると、乗鞍岳 の左側に蓑傘を伏せたような三角形をした山がみえ る。これが山頂を他県と共有しない岐阜県の最高峰、 笠ヶ岳 (標高 2.898m) である。

笠ヶ岳の山頂からの稜線はなだらかな連なりをもつ のに対して、東側の山腹は険しく急峻な約 1,400mにお よぶ絶壁となり、そこにはほぼ水平に続く明 瞭な縞模様がみられる。

## 2 - 1 1 4 古川祭屋台 (292点)



古川祭は毎年4月19日、20日に開催される気多若 宮神社の例祭。「神輿行列」、「屋台行列」、「起し太 鼓」という、"静"と"動"の3つの行事からなる。 「古川祭の起し太鼓・屋台行事」の名称で国の重要無 形民俗文化財に指定され、2016年12月にはユネスコ 無形文化遺産に登録された。

古川祭は古くは旧暦の8月6日(太陽暦の9月上、 中旬頃) に開催されていたが、1886 年 8 月 に疫病が流行し例祭ができなくなったこと から 11 月に変更された。1889 年 (明治 22 年)より現在の日程となった。



## 2-115 高山祭屋台の祖型となった山車 (704点)



江戸の神田祭、山王祭は、かつて屋台が江戸城内に 入って天覧の栄を受けた。その経路が分かっていて、 伸縮の仕組みがある屋台であった。この構造が高山の 屋台に継承されていると考えられている。江戸型の山 車は、現在、栃木市の山車「静御前」として残ってい

かつて、江戸で山車がくぐったという田安 門は、国指定重要文化財で、九段坂上にある。 門の前の土橋が千鳥ヶ淵と低地の牛ヶ淵の 水位調整をしていた。



## 2-116 高山祭屋台の彫刻の原点・立川和四郎彫刻 (444 点)



<立川和四郎の「五台山」の獅子彫刻>

春の高山祭の屋台「五台山」の獅子彫刻は、長野県 諏訪(下諏訪町、諏訪市)の立川和四郎(たてかわわし ろう) が彫った。天保8(1837)年、与鹿16歳の時で ある。組内では祭礼の日まで制作を秘密にしていて、 高山の人は新しい彫り物を見て仰天したという。谷口 与鹿は和四郎の躍動する獅子彫刻を見て、強 く影響を受け、その後、高山祭屋台の名彫刻



を数々生み出すことになる。

# 2-117 山岡鉄舟(静岡の史跡) (198点)



補陀洛山鉄舟禅寺

鉄舟寺はもと久能寺といい、今の久能山にあって、およそ 1,300 年の昔、推古天皇の時、国主久能忠仁公によって創立せられ、奈良朝の初期行基菩薩が中興せられた。当時坊中 360、衆徒 1,500 人もあり、豪盛を誇っていた。また嫌倉時代以後の貴重な文献、仏像、仏画、納経、什器等数々の宝物が今日まで寺に残されてある。

# 2-118 田中大秀翁 (161点)

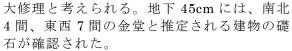


田中大秀翁は、安永 6 年(1777)8月、高山一之町の薬種商に生まれた。現在、下一之町鍋島茶舗になっている場所である。幼少より学問に長じ、25歳の時、伊勢松阪の本居宣長に入門し国学を研究した。国学とは、江戸中期に興った復古主義的文学運動で、我国の民族精神の根元である古道を「古典」の中に追求しようとしたものである。大秀翁はたくさんの研究書を著し、当時の国学者番付では、最高位に位置付けられるほどの評価を得ている。

# 2-119 飛騨匠の史跡 飛騨国分寺、飛鳥~奈良時代の史跡 (67点)



奈良時代当時、七重搭、金堂、仁王門などを備えた 壮大な伽藍があったと伝わる。『類聚国史』に「弘仁十 年(819) 八月飛騨国国分寺災」とあるが、その後、近 世まで記録がない。昭和29年(1954)、本堂の解体修 理時に、建築様式と手法は室町時代中期以前、正面向 拝と東側は桃山時代の修理であることがわかった。向 拝等は金森氏が国分寺の再興を助けた際の





# 2-120 大津京・近江神宮(飛騨匠の都造り) (72点)



天智天皇6年(667年)に同天皇が当地に近江大津宮を営み、飛鳥から遷都した由緒に因み、紀元2600年の佳節にあたる1940年(昭和15年)の11月7日、天智天皇を祭神として創祀された。

太平洋戦争の終戦後である神道指令が発令された 1945年(昭和 20 年) 12 月 15 日のまさにその当日に、 戦後復興を祭神(天智天皇)に祈願した昭和天皇の勅 旨により、同神宮は勅祭社に治定された。

例祭は大津宮に遷都された記念日の 4 月 20 日に勅使が参向して行われる。

## 法輪寺・聖徳太子の御子山背大兄王が建立 (66点) 2-121



法輪寺は斑鳩の里でも北方にあり、三井という土地の 名によって三井寺とも呼ばれています。

三井の地名は古く、聖徳太子が飛鳥の里より三つの 井戸をこの地にお移しになったところから起こったと 伝えています。

法輪寺の西北、歩いて3分の場所には、聖徳太子が 掘られたという国史跡の井戸(「史跡 三井」) が遺されています

## 2 - 1 2 2 鶉田神社 (115点)



宝亀二年創祀。天武天皇の第三皇子一品舎人親王の 孫権中納言式部卿秀重、宝亀二年鶉の森を拓き、鶉の 郷と名付け、郷内天王森に鎮守の祠を建て素盞鳴尊を 祀れり。弘安四年蒙古来寇の時、御祈願の為勅使参向 あり。平定の後、皇室より大床安坐の狛犬を下賜せら るる。永禄年中織田信長、斉藤龍興征討の際戦勝祈願 あり。斉藤滅亡の後紋所を寄進し、且つ社殿改築寄進 あり。後光明天皇正保年中社殿炎上したれど も、御神体及び大床安坐の狛犬のみ難を逃れ

たり。其の後加納藩主松平丹波守光重に於い て再建し、且つ社田旧高十石を寄進せらる。

## 2 - 1 2 3 加太春日神社 (121点)



加太春日神社の創建年代は明確ではないが、紀伊国 造家旧記によると、神武天皇御東征の御代に、天道根 命が神寳二種を奉じて加太浦に上陸、頓宮を造営して 天照大御神を祀ったことに始まるという。

当地は海に面して漁業の盛んなところであるため、 のちに航海安全と大漁を祈願する住吉神社を合祀した らしく、文保元年(1317年)6月29日付賀 太庄住吉社への寄進状(向井家文書)が残さ れている。

## 2 - 1 2 4 西光寺 (84点)



寛文二年(1662年)本願寺第十三世良如上人より木 仏(阿弥陀如来像)と寺号(西光寺)を下附されたと伝 わる。当初しばらくは現在の大阪府八尾市にある恵光 寺の末寺であったらしい。堂内正面にある鳳凰の欄間 には、泉州貝塚左甚五郎伝子、岸上但馬守藤原朝臣定 勝とある。本堂と山門は、昭和47年に記念事業の一環 で改築され、当時としては珍しい鉄筋コンク

リート建て銅葺き屋根である。

## 2-125 三十三間堂 (171点)



す。

三十三間堂という名前は、南北 120m に渡る大きな 本堂の内陣に「33の柱間」があるという特徴から由来 します。「三十三」という数字にも理由があり、観音様 が人々の救済のため「三十三の姿に変化する」という エピソードに基づいています。

三十三間堂は蓮華王院の本堂として、1164年に平清 盛の寄進により、後白河上皇の法住寺殿内に離宮とし て建てられました。創建当時の外装は朱塗 り、建物の内部は花や雲文様などが極彩色で 彩られ、豪奢な作りだったと伝えられていま

